藤屋 侃士
（下松市幸ケ丘）

遺体は死体に非ず
～新年度雑感～

新年度が始まった。隣の家には四人の子供がいるが、男の子が中学生に、一番下の女の子が小学生になった。赤ちゃんがあれよあれよという間にランドセルを背負う。住んでいる団地全体が老人ホーム化する中で、子供たちの成長は輝く芽吹きのようだ。

新年度や芽吹きとは無縁の自分だが、今年ばかりは新年度だと自覚させられる。消費税アップ、通う教会の神父の異動、韓国から来ていた女子修道会の撤退などなど。特に八十二歳のスペイン人神父が広島に異動された。祭服を着て説教をする時は若々しいが、祭服を脱ぐとやはり八十二歳の老人だ。高齢になっても新任地で働く…神の道を歩むといっても少し過酷に思える。

いや、他人事ではない。病気のスーパーマーケットを自認する私は、平均寿命ぐらいしか生きられないだろうが、その通りならあと六年弱で人生が終わる。新年度は死への階段を一段登ること、いやが上にも「死」について考えさせられる。

先日、映画「遺体　明日への十日間」を見た。東日本大震災の時、釜石の遺体安置所でボランティアとして働いた実在の人物の活動を描いたものだ。ルポライター、石井光太の「遺体　震災、津波の果てに」（新潮社）を君塚良一監督、西田敏行主演で映像化。話題の映画の一回限りの上映、入れるかと心配しながら三十分前に会場に行ったのだが、ガラガラであった。

上映後、作品のモデルとなった釜石で民生委員をしている千葉淳さんの講演もあった。「映画で描かれていたことはほとんどが事実です」と時折、涙しながら話された。釜石に近い大槌に行ったが、繁華街が荒野になっていたことを思い出す。東日本大震災は今も行方不明の二千人を含めると犠牲者二万人。三年過ぎた今も仮設住宅で生活している人が二十七万人もいることを改めて思い起こした。

すぐ原作を買い求めて読んだが、日常生活が一瞬のうちに死とがれきの世界になる。人の命のはかなさをたたきつけられる。そんな中で安置所でボランティアとして働く主人公が「死体ではなく、ご遺体です」という言葉が胸を打つ。人の命の尊厳が伝わってくる。

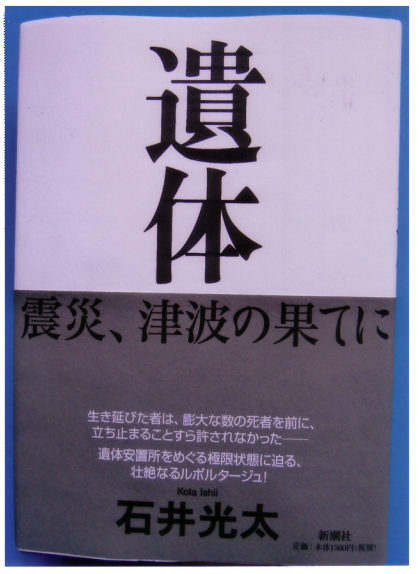
しかし、死後、本当に復活し、神の国に入れるのだろうか？信仰薄き自分にはその確信がない。だから有限の迫り来る死を考えると重苦しい気分になる。上映会がガラガラだったことがわかる。

私も含め誰もが死ぬのに、それから目をそらそうとする。今回のテーマは何度も書くのを止めようとした。しかし「巡礼の道」と題している以上、時には真剣に死と対峙（じ）しようと重い腰を取る。

巡礼とは限りある命をどう生きるか、死とどう対峙するかを源泉としているような気がする。どう死を迎えるかは、どう生きるかにかかっている。

一瞬にして命を失った二万人の方々の冥福を祈るとともに「ご遺体は死体ではない」という言葉に復活信仰のような希望を感じたのである。

主演の西田敏行を彷彿とさせるモデルの千葉さん（右）と



映画の原作となった本